

書評

ハインリッヒ・ポピッツ著 『疎外された人間』

——若きマルクスの時代批判と歴史哲學——

Heinrich Popitz: Der entfremdete Mensch,
Zeitkritik und Geschichtsphilosophie des
jungen Marx. Verlag für Recht und
Gesellschaft, Basel, 1953. SS. 172.

宮 鍋 幟

最近、西獨のマルクス主義研究はいちじるしい展開を示しているが、その特徴は、研究が主として實存主義哲學者・キリスト教神學者等の手によって、しかも組織的に行われている、という点であろう。このような傾向は、たとえば、チュービンゲン大學キリスト教神學者を中心とする「社會倫理研究會」の講演集『Zur sozialen Entscheidung』(Tübingen, 1946.)にすでにうかがわれるが、昨年出版された「プロテスタント諸派アカデミー」の共同研究『Marxismusstudien』(Tübingen, 1954.)はさらにはっきりと示されている。ここでは彼らによるマルク

ス主義との積極的な對決が意圖され、若きマルクスからスターリンにいたるまでの廣汎な諸問題が取りあげられている。そして内容の點からいえば、これらの研究には結局マルクス主義を「終末論」・「目的論」・「一千年至福説」とみなしその主觀的・非合理的性格を強調しようとするものが共通のようである。

私がここでポピッツの『疎外された人間』を取りあつかおうとするのは、本書が體系だったもののすくない若きマルクス研究のうちではそれなりにまとまっております、しかも最新の研究書だからであるが、さらに右のような西獨最近の事情をかえりみると、本書によってその傾向の一端を具體的に示しうるとも考えたからである。もっともこれは本書の内容からみた上でのことであって、本書の出版はスイスであり、著者ポピッツについてもただ本書が著名な實存主義哲學者ヤスパースの編集による『Philosophische Forschungen』の第二卷として公刊されたということから、その立場をわずかに推測しうるにすぎない。

さて、序章によればポピッツは、『共産黨宣言』にいたるまでの若きマルクスの發展を、つぎの三段階に區分する。(1)一八三八年末——四四年はじめ。(主要著作として)『學位論文』・『ヘーゲル國法論批判』・『獨佛年誌』。(2)四四年はじめ——四五年はじめ。パリ時代。『パリ草稿』・『神聖家族』。(3)四五年——四八年。ブリュッセル亡命時代。『ドイツ・イデオロギー』・『哲學の貧困』・『賃労働と資本』・『共産黨宣言』。

第一の時期は、ヘーゲル國家哲學との對決によって特徴づけ

られ、マルクスは解放理論の最初の洞察に達する。第二のそれは、古典派經濟學の研究で表示され、こゝでマルクスは、決定的な轉回を示す社會批判の包括的な構想をうちたて、ヘーゲルおよび古典派經濟學から訣別する。第三のそれは、史的唯物論にかんする著作で代表され、さらに、マルクスの經濟學洞察は深まる。

ポピッツは、若きマルクスの發展を以上のように區分するが、本書では、この三時期にわたって全面的な研究がなされているわけではなく、第二期までで、それも『學位論文』から『國法論批判』にいたるあいだのマルクスの諸論文はほとんどまったく考察されず、第三期については、最後にきわめて簡単にふれられているにすぎない。

本文の要約にうつるまえに、あらかじめ著者の見解を示しておけば、それは、若きマルクスの思想を、フランス革命以後のドイツ・觀念論、ドイツ・ヒューマニズムにみられる終末論的歴史哲學的思想の發展・深化であるとし、それが『國法論批判』をへて『バリ草稿』において結實する、と主張する點であろう。ポピッツは、とくに、シラー↓若きヘーゲル↓若きマルクス、という發展路線を強調するのである。

二

第一章『時代意識の諸問題』こゝでは、青年ヘーゲル派の時代意識についての考察を出発點として、ドイツ・ヒューマニズ

ムおよびドイツ觀念論の時代批判と歴史哲學的思想が解明されている。

青年ヘーゲル派は、自己の理想とするドイツ哲學と現實のあいだに矛盾を感じ、現實を變革しようとする「劃期的な意識」にみちていた。しかし、かかる劃期的な時代意識は、たんに青年ヘーゲル派にとどまらず、フランス革命以後のドイツ市民階級の代表者たちに一貫していた。この發展をたどれば、ヘルダー、フンボルトおよびシラーから、ノヴァーリスおよび「チュービンゲン神學院の三人の偉大な仲間」(ヘルダーリン、シェリングおよびヘーゲル)から、フィヒテ、アールント、アイヘンドルフおよびハイネにいたる。「人間解放」の試みは、この發展の各段階において、それぞれ深化され、若きマルクスの『普遍的解放』の告知にいたるのであって、それらはいずれも、一つの歴史哲學的思想にもとづくラディカルな時代批判である。

彼らは、時代を『苦惱のよるめき』(ヘルダー)、『顛倒と粗野』(シラー)、『無信仰』(ノヴァーリス)あるいは『絶對的な墮落』(フィヒテ)とみながら、しかもかかるベシミスティックな時代意識を、現狀を辨證法的に「反指定」と考えることによつて、終末論的な歴史觀と結びつけ、時代の制約からの人間解放という課題を追求する。

なかでもシラーの時代批判(『人間の美的教育』一七九五年)は、舊の時代をこえて、ヘーゲルおよび若きマルクスの問題にまで説きおよぶ。シラーは、階級分裂・分業・國家の機械化に

よって個人の『諸力の調和』が破壊され、各人は部分的専門人になったこと、さらに、國家が『眞の權威』を失い個人が『眞の獨立』をなくしたことによって、國家と個人とは對立するにいたったことをみぬいた。このようにシラーは、近代的發展のプロセスを説明しようとして、經濟的・社會的問題の洞察に達するが、しかしそれはまだ萌芽的であり、彼の歴史哲學のうちへ包攝されない。したがって彼は、政治的解放思想に反對して、國家という『生きてゐる時計仕掛』の修理は『齒車をその廻轉中にとりかえねばならない』のに、革命の遂行は、この齒車の廻轉をとめての修理であり、個人の物質的實存をおびやかすものと考えた。シラーの『人間にたいする尊敬』は、人間の物質的實存を危険にさらすことの正しさについて疑問を抱き、革命は人間の完成の先取であるとしてこれを拒否するのである。こゝから彼は人間の『美的教育』を説いて、ペシミスティックな時代意識を『思辨的に克服』しようとした。

シラーの抱いた疑問にたいして、若きヘーゲルはつぎのような興味ある解決を示す(『體系斷片』一八〇〇年、『ドイツ憲法論』一八〇二年)。理念と現實との矛盾を感じ、時代によって『肉なる世界に追いやられた人間』は、そのままにとどまるかぎり『永遠の死』を意味し、他方、彼が實踐にのりだし、『運命に強力を加え』たとしても、やはり『外なる特殊が特殊に對立する』といふ結果をうみ、『運命はやはり運命としてとどまる』。かくて、いずれにしてもかかる人間は、『運命』を『絶對的制

限』として意識せざるをえない。若きヘーゲルは、歴史的『運命』と精神的『自由』のこの矛盾の克服を、發生的・辨證法的分析によって行う。すなわち、現實そのものの矛盾の・發生的客觀的な・認識によって現状の方向づけがえられ、これによって、否定的觀照と恣意的實踐のさきの對立は克服される。現實そのものが、その反對を自らのうちにうみだし、その解體のプロセスをたどる。したがって、若きヘーゲルにとってははじめ絶對的なものとみえた運命そのものが、いまや自らを歴史的に變化させるものとなった。

そして、かかる方法的解決にもとづいてヘーゲルは、この時代のあらゆる徴候はもはや『古き生活に満足しえぬことを示している』と斷じ、新時代への徴候として財産の權威喪失・貧富の對立・宗教的制限の止揚等を擧げる。また彼はドイツにおいては、國家權力和『普遍性』はすでに分離しており、權力領域は一つの『特殊領域』となつてゐることを示す。したがって、若きヘーゲルにとっては、時代の急轉回、シラーのおそれたような人間完成の先取ではなく、歴史の「生きた時計仕掛」がそれにふさわしい仕事を果しておいたので、人間がその齒車をかえることを意味する。若きヘーゲルのこの時代批判は、後期では通俗的見解(『時代との和解』)の背後にかくされてしまつが、若きマルクスの『固有な對象の固有な論理を把握すること』(『國法論批判』)という・方法的態度は、若きヘーゲルの・理想と現實との分裂をサインそのものの客觀的な分析によって基

「癡づける」という・意味豊かな發生的方法をうけついでものであることを、ポピッツはとくに強調している。

ところで、若きヘーゲルにとっては『自由と運命』という對立の克服が問題であったが、後繼ヘーゲル主義に屬する若きマルクスにとってさしあたってこの「運命」とは、ヘーゲルそのものであり、したがってマルクスは、まず、自己の精神的位置の解明から出發する。『學位論文』の背後にあった若きマルクスのテーマはこれである。アリストテレスとともにギリシャ哲學の歴史は終りをつけ、『ミネルバの鼻の翼はおとろえたように見える』。エピクロス派・ストア派・懷疑派は、アリストテレスの描いたこの薄明が『黄昏なのか夜明けなのか』なお不明であるために、『個々のランプを求めざる蛾』である。こうしてマルクスは、一つの完成を示し全體的となったアリストテレス哲學と其の後の諸學派との關係を明らかにし、これと類比して、後繼ヘーゲル派はいかにしてヘーゲルを克服しうるか、という課題を解こうとした。その解答はつぎのようにして與えられた。哲學は、アリストテレスやヘーゲルにおけるように全體的となったとき、もはや『直線的な延長』が不可能となるような『交點』にぶつかる。いまや哲學は『外界に向い』、『非哲學的な世界』を『哲學的に』しようとする。これは『哲學の實現』である。しかし哲學の實現とは哲學の喪失である。かくて、終末に達したヘーゲル哲學は、それを實現することによってのみ克服されうる。そして、哲學の實現とは、『個々の實存を本質に

おいて、特殊な現實を理念においてはかる』ところの『批判』である。若きマルクスは、かかる現實の批判を自らの課題とし、それによってヘーゲルを克服しようとした。したがって、若きマルクスは、自らをドイツ哲學發展の『主體的要點』として、『ドイツ觀念論のエピローグ』として、自覺した點において、かかる自己認識のための將來への展望をもたなかつた他の青年ヘーゲル派と、早くも區別されねばならない。このドイツ觀念論の「エピローグ」を、一方では、灰色を灰色として描くことによってシェリングが確認し（『ベルリン大學における第一回講義』一八四一年）、他方では、この灰色からドイツの政治革命がうまれるとの確信に燃えつつハイネが宣言する（『ドイツの宗教と哲學の歴史』一八三四年）。

第二章『一八四四年までの若きマルクス』。まず『國法論批判』が考察される。こゝでフォイエルバッハは若きマルクスに「重要な影響」を與え、マルクスのヘーゲル國家哲學との對決を授護するが、同時にマルクスはフォイエルバッハをこえて進み、フォイエルバッハの影響は「表面的な」ものにとどまる。フォイエルバッハのヘーゲル批判は、ヘーゲルにあっては具體が抽象からみちびかれ、主語と客語が顛倒される結果、ヘーゲルの人間は「自己疎外される」という點にあった。ポピッツはこゝで、先取的に、疎外概念の擴大・深化についてつぎの注意を與えている。すなわち、「疎外」の概念は、ヘーゲルでは、自己自身を知りつつある精神の特殊現象學的な段階を示す。つづ

いてフオイエルバッハはこの用語をとりいれて、包括的に、あらゆる思辨的思惟に適用し、最後に若きマルクスは『バリ草稿』で、これを人間の状況にあてはめ、従來の全歴史は、人間の『眞の本質』からの『疎外』とした。

さて、『國法論批判』において、マルクスはまず、まったくフオイエルバッハにもとづいて、現實的主體からでなく、超個人的國家論理念から出發するヘーゲルの顛倒を批判する。しかしさらにマルクスは、早くも彼独自のヘーゲル批判を行う。それは、ヘーゲルの『媒介』の「方法的な」批判である。マルクスは、ヘーゲル國家哲學が國家と市民社會の分裂の事實に由来すること、そしてヘーゲルはこの分裂に危機をみとめたことを、ヘーゲルの分析の『深遠さ』として賞讃する。ただし、ヘーゲルは、この經驗的事實を隠蔽することなく、あるがままに敘述したからである。しかしヘーゲルは、市民社會の諸身分を政治的諸身分とすることによって、この分裂を媒介（調停）し、かくてこの分裂せる兩極は人倫的國家の有機的モメントになる、とする。ところがマルクスは、このヘーゲルの媒介を『論理的・抽象的』なものときめつけ、こゝにヘーゲルの『神祕主義』をみる。そしてこの論證を、マルクスはつぎのような對立概念の分析を手がかりとして行う。

『對立』には、(1)相異なる二つの本質の現象的對立（人間と動物）、(2)統一的本質から分化した本質の現象的對立（男と女）、(3)統一的本質の論理的抽象としての現象的對立（唯心論と

書評

唯物論)があるが、第一の對立は媒介されえないし、他の二つの場合は、やがて『統一的本質』が貫徹されるので、無意味である。では、普遍性と特殊性の分裂はいかに理解されるか。それは(3)と類比される「現實的」な抽象過程で、『本質的』な「矛盾」(『矛盾』とは「闘争による決定への、ろし」である『現實的な對立』を意味する)であり、したがって、阻止することもできないし、また論理的にも媒介されえない。それは、統一的本質の・その現實的な抽象による・その發展の最高段階において現象する・自らに對する矛盾である。ヘーゲルは近代國家の現實性から没批判的に出發したために、普遍性と特殊性の二元論におちいり、それを論理的に媒介しようと試みたが、かくてマルクスは、普遍性も特殊性もともに主體に内在する本質力であるとし、人間の内部における兩者の直接的同一性を要求する。こゝからマルクスは、『立憲君主制と共和制との闘争はそれ自體なお抽象的國家の内部におけるたたかい』であることをみぬき、眞の共同體としての『デモクラシー』を考へる。したがってこゝでは、すでにのちの『政治的解放』と『人間の解放』との區別(『ユダヤ人問題』)の萌芽がみられる。したがってヘーゲルは、若きマルクスによって、若きヘーゲルが試みたと同じ方法で批判されたのである。

さらに、この分裂の現象が人間の本質に不適合であるとき、いかに理解されるか。それが人間の本質からの『疎外』なのである。この疎外は、人間の『眞の本質』という「肯定的尺度」

にあてはめて理解され、いまだ一つの「價值判斷」にすぎないが、しかし、「經驗的分析の出発點」であり、それによってマルクスは『固有の對象の固有の論理』の認識に向う基礎をえた。マルクスは、『國法論批判』のうちで、早くも經驗的分析をはじめ、市民社會の『疎外』現象が指摘される。官僚主義者・個人主義者の目的と手段との顛倒、その幻想主義が批判され、『私有財産』の支配が語られる。さらにマルクスによって『無所有の・具體的労働の・身分』が『市民社會』の『基礎』であることが發見される(『プロレタリアートの萌芽』)。要するにマルクスは、市民社會の構造は、人間の本質諸力の抽象にもとづくことを明らかにする。この分析の完成のためには、より深い社會學的・經濟學的洞察を必要とするが、こゝでは、私有財産の支配、直接的労働の身分の意義をみいだしたことによって、すでにかかる洞察への歩みははじまっている。

つづいて『獨佛年誌』では『國法論批判』の成果が綜括され、部分的な『政治的解放』に對置して、普遍的な『人間の解放』が定式化され、こゝから社會批判がなされる。またこの將來の革命のない手として『プロレタリアート』が指摘され、哲學はこれと同盟することによって、その『實現』の基礎を獲得する。ヘーゲル、シラーおよび若きヘーゲルは、いずれも『思惟する人間』と『惱める人類』との結合を語り、若きマルクスも同様な言葉でそれを要求した(『獨佛年誌』にのせられた『ルーゲ宛の手紙』)が、『惱める人類』というこの言葉は漸次深化さ

れ、いまや『プロレタリアート』となるにいたった。
第三章『疎外された人間』。こゝではポピッツは、彼が若きマルクスの著作のうちでもっとも重要視する『バリ草稿』を分析する。

マルクスは、古典派經濟學にもとづいて、まず分析を近代的奴隷たるプロレタリアートの状況に集中し、労働者は富者のためには『驚異的作品』を生産するが、自らのためには『赤貧』をうみだすという結論をうる。そして、この『赤貧』は私有財産から由來するばかりでなく、人間の本质からの疎外にもとづくとし、マルクスはこれによって、資本主義社會の全體的位位置を理解しようとする。すなわちマルクスは、『労働の哲學』を基礎として、人間の疎外の敘述を一つの完結せる體系に擴大しようを試みる。

『労働の哲學』において、マルクスはヘーゲルの意義をみとめ、かつこれを利用した。労働は、ヘーゲルにあっては、人間の・自己指定と自己把握の・自己外化と自己獲得の・辨證法のプロセスであり、人間の歴史の全體である。個人の諸力・諸素質・類的意識は、労働を通してのみ生成する。マルクスはこれをみとめ、ヘーゲルの『偉大さ』について語ったが、他方、彼は、ヘーゲルのみとめるのは『抽象的に精神的な労働』だと非難する。が、この非難は當らない。なぜなら、ヘーゲルにあっては、労働は、直接的自然が人間の諸物としての物の世界に生成することを意味していたからである。ところで、マルクスの

勞働の哲學の出發點はフョイエルバッハである。マルクスにとっては、人間は感性的・對象的本質として、さしあたっては、フョイエルバッハのように受動的で、窮乏している存在である。しかしマルクスは主體と客體のこの關係を、「フョイエルバッハにみられぬ動態」として把握する。すなわち、この窮乏が客體に能動的に働きかけようとする情熱・欲望をうみ、かくて人間は自然のうちへ自らの本質力を刻印し、自然を『人間的な對象』にし、自己を實現する。したがって、マルクスの「實現としての勞働」は、ヘーゲルの「外化と獲得としての勞働」をこえては、ただヘーゲルの勞働概念にふくまれてはいる。勞働の自然史的プロセスの思想を、彼の働勞概念のうちで具體化したのである。そしてフョイエルバッハは、マルクスにとって、ふたたびヘーゲルにたちもどるための出發點であった。

マルクスは、人間の自己實現・自己確認としての勞働の特徴づけから、プロレタリアートの勞働を「疎外」として規定するが、この點でも彼はヘーゲルとむすびつく。マルクスは、ヘーゲルは『勞働の肯定的側面をみるだけで、その否定的側面をみない』と批判するが、ヘーゲルも勞働の否定側面をみており、さらに『自己疎外された精神』は、外在化された勞働の產物としての現實界を、『彼岸の王國』において克服しようとすることをみとめており、貧富の對立、主人と奴隸との對立をも人道的立場から描く（『精神現象學』）。『法哲學』でも貧困と賤民の増大の事實は強調され、その敘述は、マルクスが勞働者の疎外と

して示したものとほぼ同様である。ただここではヘーゲルは、法的平等という近代社會の事實をそのまま受けとつた結果、『我々の雇人』と『アテネの奴隸』は同一でないとし、さらに、貧困の問題も、國家と市民社會の存立をおびやかす危険という觀點から考えられたために、解決することができなかった。

かくてマルクスは、ヘーゲルの疎外表象と同様に、プロレタリアートの『赤貧』、その『疎外された勞働』は私有財産の結果であるばかりでなく、原因でもあり、彼らに對立する人間として資本家をみいだす。さらに、マルクスは、勞働の生産物へのこの主人の支配自體が、また疎外そのものの表現であることを確認する。すなわち、マルクスは商品の交換過程の分析（『草稿』のうちにあるジェームス・ミルの『經濟學原理』拔萃への挿註）によって、生産・交換過程の社會的機能が、生産者・消費者にとつて、生産物の獨立的な性格としてあらわれること——『資本論』における「商品の物神性」——を明らかにする。交換の目的で生産された生産物は、獨立化して、生産者を屈服せしめる。したがって私有財産の持主にとつて、彼の生産物は『外的な物』となり、彼らも疎外される。ポピッツは、マルクスのこの疎外現象の分析を、それが勞働者と資本家の相互に補足しあう疎外關係を明らかにするという意味で、「補足社會學」(Ergänzungswissenschaft)と名づけている。

つづいてマルクスは、この疎外概念とヘーゲルの・人間の欲望は既得の生産水準をこえて進むという・欲望↓生産の辯證法

〔法哲學〕とを結合することによって、生産の進歩性を生産のプロセスそのものから導き出す。これが生産諸力と生産諸關係の史的唯物論の原型である。そしてこれによってマルクスは、疎外の生産は結局解放の生産であること、眞の共同體、そのための革命は近づきつつあることを強調する。したがって従来の全歴史は、マルクスによって人間性の『準備史』であるとされる。しかしマルクスのいう將來の革命は、確信的に強調されるだけで十分に證明されていないことが、ポピッツによってくりかえし主張される。

したがって『草稿』においては、マルクスの・歴史の目的は人間の人間化であるとする・「目的論的性格」は明瞭である。こゝでは「經驗論的傾向は決定的たりえず、なお觀念論的終末論が強くめだっている」。

最後に、ポピッツは『ドイツ・イデオロギー』に言及し、つぎのようにいう。そこではマルクスおよびエンゲルスによって、『哲學的良心』が清算され、『類』・『人間の本質』・『自己疎外』という用語は捨てられるが、それにもかかわらず若きマルクスの時代批判の基礎であった人間の本質からの疎外という歴史哲學的思想は、なお保持されている。また、マルクスは生産諸力の發展について「形式的に」語るのみで、「近代工業の發展可能性」については決してふれない。したがって若きマルクスの「反技術的・ロマン主義的性格」が強調されるべきである。かかる傾向は『草稿』にもみられるが、『ドイツ・イデオロギー

1』においてマルクスが、『共產主義社會』では各人は氣の向くままにふるまって『決して狩人・漁夫・牧者・批判家となることはない』、というとき明瞭である。ポピッツは、マルクスのこの「夢」は「封建主義的・貴族主義的諸可能性のロマンチックな讚美」であるとさえいい、この點で若きマルクスをフリーエ、オウエンおよびブルードンと同一視するのである。

三

以上の要約によって、若きマルクスの發展を、現存の疎外された人間の敘述および將來の革命によるこの疎外の克服という「時代批判」と、これの基礎づけをなす疎外理論という「歴史哲學」の二つの面から跡づけようとするポピッツの見解は、ほほ示しえたと思う。また、その際著者が、近代ドイツの市民的ヒューマニズムと若きマルクスとのつながりを、強調していることも理解されたであらう。

最後に私の感想をつけ加えれば、つぎのような・ポピッツの問題へのアプローチの・仕方が、何よりもまず、指摘されねばなるまい。ポピッツは、若きマルクスをのちのマルクスから・シラーやヘーゲルを若きマルクスから・みるのではなく、まさに逆の視角から眺めようとする。こうした態度は、本書の前半では比較的めだたないが、敘述が進むにしたがって次第にあらわとなり、とくに第三章においては明白である。たとえば、このことは、ヘーゲルの勞働概念にかんする若きマルクスのすぐれ

て本質的な定式化⁽⁶⁾が、ポピッツによってほとんど理解されず、若きマルクスの労働概念をヘーゲルのそれに解消しようとする彼の試みのうちに、特徴的に示されているだろう。そしてポピッツが、若きマルクスの「思辨的諸前提」を強調して、これを「目的論」・「終末論」・「辨神論」・「一千年至福説」・「ロマン主義」等々さまざまな言葉で表現する結果となったのも、かかる誤ったアプローチの仕方によるものといえよう。

かくては、シラーやヘーゲルと若きマルクスの區別、いいかえれば、觀念論と唯物論、思辨的人間觀と現實的人間觀、「人類」の立場と「プロレタリアート」の立場のあいだの決定的な斷絶は、「思辨的諸前提」のこの強調の背後にみうしなわれ、若きマルクスの『現實的ヒューマニズム』は、市民的ヒューマニズムに解消されてしまふであらう。ポピッツは、『草稿』においてマルクスの「思想的特質」がもっともよく示されている、というが、ポピッツにより若きマルクスの「思想」がこのように歪曲されて主張されるかぎり、かかるポピッツの『草稿』の解釋のうちこそ、逆に彼自身の「思想的特質」が明瞭に示されているといえるだろう。

さらに、ポピッツが彼の分析を、『學位論文』からただちに『國法論批判』へとうつしていることも、諒解に苦しむ點である。なぜなら、とくに『ライン新聞』におけるマルクスの諸論説は、この兩者のあいだをつなぐものであり、すでに社會的・經濟的諸問題にたいするマルクスの認識および批判がなされて

いて、これを看過することは決して許されないからである。したがって、ポピッツの・マルクスの「最初の社會批判」としての『國法論批判』の位置づけも、訂正されなければならないであらう。

このように本書は根本的な點でも、また個々の點でも批判されるべきものをもっているが、しかしそれでもなお私は、(1)マルクス主義のドイツ的源泉、とくにシラー↓若きヘーゲル↓若きマルクスという發展路線、(2)『國法論批判』におけるマルクスのヘーゲルに對する方法的批判、(3)『草稿』でのマルクスがすでに「商品の物神性」を内容的に認識していた點、等について、著者から學びとることができると思う。

(1) この講演集の序言によれば、「社會倫理研究會」はチュービンゲンをはじめとする西獨十五大學の兩派キリスト教神學者によって組織され、「社會問題」の研究を目的としているが、現在も活動しているかどうかは不明である。この講演集には、同會での四つの講演が收められておりとくにマルクス主義と對決していふものは、T. Steinbüchel: Karl Marx, Gestalt/Werk/Ethos. A. Huber: Das christlichen Soziallehre. 〇二二P. 69。

(2) この共同研究は一九五二年デュッセルドルフ大學をはじめとする西獨十五大學によって組織され、本書はその成果の一部を發表したものである。なお、この書については、林健太郎氏がすでに紹介されている(『思想』一九五

一橋論叢 第三十三卷 第五號

四年九月號所收、『東獨と西獨のマルクス回顧』。

(3) なお、東獨では近くいぎの書物が出版されるはずである。Rose Günther: Der junge Karl Marx. Aufbau Verlag.

(4) この叢書は、十二巻から成っているが、他にどんなものかの研究があるか、それがどの程度公刊されているか等についてはまじたく判らなう。

(5) マルカ『の『草稿』を同様な意味で Komplementsoziologie と名づけたことは附記して置かねば。 Vgl. K. Bekker: Marx' philosophische Entwicklung, sein Verhältnis zu Hegel. Zürich/New York, 1940, S. 70 ff.

(6) トーダルの労働概念をたゞする若きマルクスの定式化の正しさについては、すづてわが國では確認されてゐると思ふので、ここでははふれなう。最近では鼓華雄氏がこの點を適切にまとめられる『經濟評論』一九五四年十月號所收、『史的唯物論と經濟學』(四一頁以下)の参照されたい。

(7) とくに『木材盜伐法討論』および『モーゼン河畔より』を見よ。そこでは、私有財産の支配・私有財産の道具たる國家・利己主義等に對するマルクスの批判が、既に『無所有の大衆』・『貧困階級』の立場からなされてゐる。

(8) 最後に讀者の理解に資するため大きな目次のみをかかげておこう。

Einteilung der Jugendschriften

I. Probleme des Zeitbewusstseins

1. Das epochale Bewußtsein der Junghegelianer
2. Zeitbewußtsein und Geschichtsphilosophie (Heider, Schiller, Novalis, Fichte)

3. Zeitkritik und Emanzipation (Schiller)

4. Zeitkritik und Zeitbewußtsein (Hegel)

5. Das epochale Bewußtsein des jungen Marx

6. Der Epilog des Deutschen Idealismus

II. Der junge Marx bis 1844

1. Der erste Hegelkritik

2. Der Ansatz der Gesellschaftskritik

3. Die Idee der univarsalen Revolution

III. Der „Entfremdete Mensch“

1. Problemstellung

2. Philosophie der Arbeit

3. Die Phänomene der Entfremdung

4. Die Dialektik der Entfremdung und ihre gesellschaftsphilosophische Begründung

5. Zusammenfassung und Ausblick

Interpretationen der Jugendschriften

(一七五頁・一・二五)